

## シンポジウムのまとめと今後の展望

稲本 正

### ソフトで日本の森を活性化しよう

稲本でございます。皆さん、お忙しいところお集まりくださりまして、ありがとうございます。考えてみると、今日はウィークデーのお昼なんです。皆さん、どうして来たのかな（笑）、よほど暇だったのかな、会社の命令だったのかな、いや、そうじゃなくやはり熱意でしょうね。今日は実のところ、50人ぐらいの方をお断りしてしまっただけです。ということは、このテーマが非常に今の時代に合っていたのではないかということを感じます。しかも、来られた方が19歳から83歳まで、役人の方からフリーターの方、企業の方、いろいろな方がお見えになった。日本が抱えている問題を真剣に考えようと、さまざまな立場の人がいらっしやっただけではないかと思えます。

今回のこのディスカッションで面白かったのは、ふつう日本の森を考えるというときはだいたい林野庁主催で、林業経営者の人たちが集まって、「ああもうだめだ、日本の森はもうどうしようもない、僕らはもう生きていけない、なんとかしてくれ」というような話から始まるんですが、面白いことに、集まった方も、またとりわけパネリストの人にも、林業関係者がほとんどいない。これは、視点が新しくなったひとつの試みとして非常に面白かったと思えますし、お先真っ暗だと言ってみてもしょうがないので、「何かを新しくやろう」という意欲が前面に出ていたのは、すごくよかったです。

それから、最初にソフト経済センターの町田さんとお話しになりましたが、本日は

ソフトの話が多かった。いまの日本の国の話をすると、たいていハードの話になるんですね。よくいわれる箱物行政ですが、それを何に使うかなんて話しかない。それが今日は、基本的にはソフト、何をしようとしているのか、これから人はどうしようとするのかというふうには、ソフトで話が始まりソフトに終わったのは、非常にこの種の集まりとして意義あることだと思います。

今の日本の国の80兆ある予算も、みんなソフトに回して、箱物をほとんどなくすると、日本はすぐ変わりますよ。皆さんは税金を納めていて、どこに何に使われているか、もうちょっと見たほうがいいですね。某河口堰には8千億です。8千億ってたくさんですよ。トヨタさんも儲けていらっしゃるけれど、トヨタさんの儲けの半分をダムみたいなものに使っているわけですから、やっぱりもう少しソフトに、ただこの話だけでソフトの話をするのではなく、そういう方向に国が進むよう目を向けていけば、日本はいくらでも変わると思えます。

### 「森の合唱団」と漆のカートリッジ

ここでひとつ、ソフトの見本をお見せしましょう。これは何かというと、「森の合唱団」というものです。センダン、ヒノキ、ナラ、ホウ、ブナ、キハダ、カバ、トチを使った、木琴のような楽器ですが、百聞は一見にしかずではありませんが、鳴らしてみましよう。

### 【木琴状の「森の合唱団」をたたく】

ほら、幅が全部同じなのに、ドレミファが出るんです。（拍手）

何がすごいかというと、ふつう木琴は、この幅が狭くなると音が高くなり、幅が広がると音が低くなります。ところが、全部同じなのに高低があるでしょ。要するに、木によって音が違うわけです。

### 【メロディを弾く】

これは、発見なんですね。やってみたら、必ずしもトチが高いということじゃないです。トチにも声の高いひとと、低いひとがいるんですよ。ヒノキでも声が高いひとと、低いひとがいます。

これがどうしてできたかということ、うちのスタッフに絶対音感を持つてる女性が2人いたからできたんです。つまり、ソフトでここまでいける。

何を言いたいかというと、こういうソフトを開発していくためには、やっぱり森のことをもうちょっと勉強しなければいけないということ。僕は飛騨に工房を造って木工をはじめた30年です。30年間ずっと木によって音が違うことはわかっていたんですが、ドレミファの音階を出すまでにはたどり着けなかった。絶対音感の女性がいたというソフトがあって、僕らの木工の技術とドッキングし、ここまで高まったからです。

もうひとつ、ソフトの例をお話します。オルトフォンという会社をご存知ですか？レコードのアナログカートリッジの世界一のメーカーです。ふつうカートリッジは金属かプラスチックでできているけれども、木でできないか。しかも、漆を塗ってでき

## 稲本 正 オークビレッジ・代表 社団法人日本環境教育フォーラム・常務理事

1945年富山生まれ。工芸家・作家。74年飛騨に工芸村・オークヴィレッジを設立、代表となる。91年には木工・森林のプロ養成を目指す教育機関「森林たくみ塾」を開設。94年「森の形 森の仕事」（世界文化社）で毎日出版文化賞奨励賞受賞。日本環境教育フォーラム常務理事、C.C.C.（自然文化創造会議）議員、ハンス大賞 審査員なども務める。「森を創る森と語る」（岩波書店）、「森の惑星」（世界文化社）ほか著書多数 <http://www.oakv.co.jp/main.html>。

ないか。漆を塗ってできればきっともっと音がよくなるだろうと相談があったんです。

それは無理だろうと。なんといってもカートリッジというのは、何mgかが勝負なんです。重さがちょっとでも違うと音が変わるんですが、3年間研究してみたら、できたんですね。これがものすごく音がいい。オルトフォンの社長もびっくりしたぐらいで、限定500個。23万円ですから、ざっと1億円ですね。こんなふうには、森から出発して技術を研究すれば、まだまだいろんな可能性があるということなんです。

### 森を学びなおし、物づくりの技術を探究しよう

日本人は、世界で一番古い法隆寺という建物を千三百何年も前に造っていたのに、残念ながらいま法隆寺は建てることができません。僕は、平成の法隆寺、いまから千何百年も立ち続ける建物を造るべきだと思うんですね。きっと、できる。それを造るためには、木を植えなければいけない。法隆寺を支えた大黒柱は、350年ぐらいの木です。木もつくるし、技術もみがいて、ぜひ平成の法隆寺をつくるプロジェクトをやりたいなと思っています。

日本はもともと物づくりの国だったわけで、車やエレクトロニクスの機械やロボットをつくってきました。トヨタさんは、それこそハイブリッドと燃料電池で世界のトップを走っています。だから、森を軸にした新しいビジネスを探る中でも、物づくりの技術というものを本気に勉強する必要があります。勉強するためには、自然にどっぷり入っていかないとだめなんです。

日本の教育は、いいこともしたけれども半分間違っていました。机で勉強させることがいいことで、森に行ったり川へ行ったらよくないんじゃないかなんて教えていたふしがあるんですね。やはり森から学ぶべきことのほうが、もっともっとたくさんあ

る。そのためにも自然学校をあちこちでつくっていくことが必要ですね。

みんな木が好きで、皆さんも森が好きだ。だから今日は集まれたんです。だけどこれをもう一回日本の大きな流れにしていくためには、もっともっと広げなければいけないし、そのためには、そこに関わる人たちがもっともっと勉強しなければいけないんです。勉強するためには、ぜひとも自然学校をたくさんつくりたい。それが広がれば子どもたちの将来が広がるし、僕ら自身、新しい日本のビジョンができてくるような気さえするんです。

今回は、物づくりのことや自然学校をテーマにしたシンポジウムをやりたい。そうすると、森を軸にした未来がさらに深まり、広がるのではないかと思います。これからも、皆さんのネットワークをどんどん大きくして、新しい日本をつくるぐらいの気持ちでお互いがんばりましょう。

本日はどうもありがとうございました。



## シンポジウムに寄せられた感想から

「今回のシンポジウムはいかがでしたか？ 率直な感想や印象に残ったことをお聞かせください」

- ・実際に社会起業家として活躍なさっている方々の生の声を聞けたということが良かったです。今までのシンポジウムだと森林関係者のぐち話や理想論だけに終わっていたように思います。
- ・とてもためになるシンポジウムでした。今、自分は学生ですが、今後どのような仕事についていくのがいいか考えているところです。シンポジウムの中盤に自分がやりたいことをやっていけばいい、という話があり、とても勇気づけられました。何をすべきかよりも、何をやりたいか、本心でおもしろいと思うものを素直に探求していけばいいんだと思いました。
- ・ますます「木のファン」になってしまいました！こんなに楽しめるシンポジウムは初めてです。「社会起業家」という概念はどの分野にも当てはめて応用することだということ、「森林」という分野に組合わせてもとてもじっくりくる面白いものだなあというのがわかったように思います。
- ・「会社はNPOを、NPOは会社を立ち上げよ！」という町田さんの一言が印象に残りました。
- ・森林の崩壊が進行している中、行政による主導で何らかの措置がなされない限り、崩壊をとめるのは難しいのではないかと考えていましたが、自分でできることを今日をきっかけに考えてゆきたいと思いました。

「森を軸にした新しいビジネスを生み出していくためには、今後どのような取り組みが必要だと思いますか？」

- ・事業を損益だけで見るとはならず、損益以外の効果、付加価値を含めたバランスシートで見ないと続かない。森単独ではなく、あらゆる社会問題の中での可能性を求めて、他の事業と協力していかないと難しいと思いました。
- ・20代の若者を中心とした新しい発想による取り組み。
- ・現場を知らずしては何もできないと思いました。できるだけ森の中でいろいろと体験し、懸命に取り組んでいくことで見えてくるのではないのでしょうか。
- ・林業／林産業の構造再編を北欧の再編成功例にならってすべき。そのうえで、森を取り巻く地域型産業・事業の創生をするとよい。
- ・町田さんのおっしゃるように、ハード志向ではなく、ソフト志向を目指していくべきだと痛感しました。「楽しい！」がキーワードであることは参考になりました。
- ・社会起業家同士が、お互いに情報交換できるネットワークづくりが必要です。
- ・思いをアクションに移すことです。今まで受身だった自分ですが、何か発信していこうと思いました。